

## わたしならできる

秋田県秋田市立河辺中学校

三年 佐藤 美莉

「十九番、秋田市立河辺中学校 ゴールド金賞！」審査員による結果発表と同時に、客席から悲鳴のような歓声が沸き起こった。それをステージ上で聞いた私の目には涙があふれた。

七月、文化会館大ホールで行われた吹奏楽コンクール小編成の部で、私たちの学校は金賞を受賞した。演奏した曲は、レハール作曲「微笑みの国セレクシオン」。十一年ぶりの快挙だった。

私たち三年生にとっては最後のコンクール、そして卒業した先輩たちにとっても悲願だっただけに、金賞に懸ける思いは強かった。たくさんの人々の思いが詰まった金賞受賞だ。

私が、先輩から部長の役目を引き継いだのは二年生の秋のことだ。前部長から、

「私たちが果たせなかった金賞の夢を叶えるために、みんなを引っ張って行ってほしい。」と言われて、心からうれしく思い、がんばろう、という気持ちになった。

それから約九か月、最後のコンクールを迎えるまであつという間だった。

コンクール三日前、全校生徒の前で自由曲を演奏する機会を与えられた。本当なら本番直前の前哨戦、

ここ一番で決めて自信を付けたいところだ。しかし、私は不安でいっぱいだった。友達や先生方、保護者など身近な人の前で演奏するのは緊張する。

「頑張らなきゃ」

と思えば思うほど不安は膨らんだ。

そして案の定、不安は的中した。

第七十小節、私の担当するクラリネットが主旋律を担当して演奏をリードする場面を迎えた。その瞬間、いきなり頭の中が真っ白になって、楽器に息が入らない。練習のときならすんなり出るはずの音が出なかったのだ。

隣のフルートや、クラリネットに続く予定のトランペットの仲間は、一瞬驚いたような表情を浮かべたが、すぐ、何事もなかったかのように演奏を続けた。

演奏が終わって片付けているとき、誰も、

「何で吹けなかったの？」

と私に尋ねなかったが、私が失敗したことは明白だった。しかも、一番の聴かせどころでの失敗だから致命的だ。私は落ち込んだ。

今まで何度も似たようなことがあった。身近な人が見ている、期待されていると思うと緊張した。プレッシャーに負けて具合が悪くなった。途中で逃げ出したくなったときも、本番がこななければいいと思ったときもあった。

そんなときは、友達に、

「大丈夫だよ、心配しすぎ。美莉ならできるって。」と励まされてもマイナスにしか捉えられなかった。

コンクール前日、不安な気持ちを変えたくて、部活日誌に自分の気持ちを全て打ち明けた。すると、先生から、

「美莉にはできると思う。いや、きつとできる！」

今までがんばってきたことは俺が一番よく知ってい

る。その俺が言うのだから間違いない。自分を信じて。自分らしく。」

というメッセージが返ってきた。すると、不思議と自信がわき、

「私ならできる。いつも通りに、自分たちらしい演奏を届ける。」

と前向きな気持ちになった。

コンクール当日、袖で待機しているとき、何度も先生の言葉を思い出してつぶやいた。そして、楽しんでやえ、と思いついてステージに立った。

あつという間の六分四十二秒だった。今までこんなに楽しい時間はなかったと思う。私のクラリネットはまるで踊っているかのように歌った。

ステージを下りたとき、一緒に演奏した仲間もちろん、待機していたサポーターメンバーも皆、後悔の残る演奏は一つもなかった、と満足の表情を浮かべていた。

部長として金賞の賞状と盾を受け取ったとき、この瞬間のためにどれだけ多くの汗と涙を流したことだろうと思った。毎日の部活動は楽しかったけれど、仲間と意見がぶつかることもあった。人の心を一つにまとめる難しさも経験した。「がんばる」という気持ち空回りして、自分を責めたこともあった。それもこれも全てこの瞬間に消え去った。そして残ったのは先生の言葉だけだ。

コンクールから一カ月以上経った今でも、先生の言葉は私に勇気とちからを与えてくれる。

「私ならできる、いつも通りに、自分らしく」と。